

「仮説」と「試行錯誤」と一人権教育研究協議会からの学び― 校長 齋藤幸之介

ゴールデンウィークを終え、本格的に学校生活を送るようになった5月でした。今年度は多くの学年が近隣地域に出かけ、公共施設や自然環境などの特色を調べています。実際に確かめる意味や価値を改めて感じています。

6年生はこの学校だよりが皆様に届くころ、八ヶ岳移動教室から帰校します。私は、一人一人がたくましくなっていることを願いながら巻頭言を書き始めています。

さて、以前も同様の形をとりましたが、私共東京都公立小・中学校長及び幼稚園長はこの時期に人権教育研究協議会という研修を受けます。今年度、私は野澤和弘さんの講演を伺いました。野澤さんは毎日新聞客員編集委員及び植草学園大学副学長であります。

今回の演題は「障害のある子の教育と人権」でした。とても重みのあるお話で、私は必死に記録をしようと試みました。その中で特に心に残ったのは「仮説」ということでした。

しかし、言い訳になります。レジュメがなかったもので、確実に聞き取って理解をすることがとても難しくありました。そこで、御著書である「弱さを愛せる社会へ―分断の時代を超える「令和の幸福論」」（2023年、中央法規出版）を読むことにしました。

大きく変わる世の中で求められること

1990年に入ってからバブル崩壊前後、例えば暴走族の台頭を抑えるがごとく改正された道路交通法、その後の校内暴力、またいくつかの少年事件等を受けて少年法が改正されて事件は減ってきた、と紹介されています。しかし、野澤さんは「事件の背景を掘り下げて根本的な改善策を講じようとせず」と問題点を指摘します。新たに顕在化したじめ、不登校、ひきこもり、といった問題に対しては、独立型社会福祉士の川口正義さんの言葉「アンテナを張ってそれを柔らかくし、子どもの言動の奥底にあるものに共感する」「子どもが試し行動をすると、大人は振り回される。それを見た子どもは「あんた（大人）だめじゃないか」とは思わない。「やっぱり私がダメなんだ」と思う」を引用しながら、大人の子どもへの関わり方を述べられています。

苦しみを取り除くために

野澤さんの御長男は、知的障害・自閉症であるそうです。幼いころから散髪には苦労したことを述べていらっしゃいます。

御長男が小さい頃はまだ何とかなったようですが、体が大きくなると床屋さんをしてこずらせ、暴れる御長男を力で押さえたそうです。しまいには、床屋さんは吹き飛ばされ、大きな重い椅子は横倒しになったと言います。このときの御自身の行動を野澤さんは「その場しのぎ」「力づく」と表現されています。

その後、野澤さんはある床屋さんを紹介されます。最初は御長男はハサミの音を嫌がって逃げていたそうですが、様々な声掛けをしたり、ハサミを出したり引っ込めたりしながら、散髪は進んでいったそうです。嫌がったらやめる、また始める、沈黙とハサミの音とが交互に聞こえたそうです。「お一できたじゃねえか。終わったよ」、御長男は褒められてホッとした顔をしていたそうです。このときの御長男の心境を野澤さんは以下のように想像します。「一番苦しんでいたのは長男だったのだ。自分が暴れるために床屋さんをどれだけ困らせているのか、父親をどんなに恥づかしくさせているのか、それでも恐怖に思ったハサミの音を、「この床屋さんは救い出してくれた」。

「仮説」を確かめるための「試行錯誤」の意味

ここで、改めて「仮説」に戻りたいと思います。野澤さんは、御講演で子供たちに寄り添いながら、いくつもの仮説を考える大切さを述べていらっしゃいます。例えば、御長男は散髪の何が嫌なのかを何通りも想像し、そしてこれを解消するためにどのような方法があるのか、という「仮の答え」を設定する、そしてそれが御長男に適しているのかを探り続ける、ということになります。

一見当然のようですが、野澤さんはある障害者施設の方の言葉を引用され、「個々の障害者に対してアセスメント（意向調査）を入念に行い、障害特性やその人の得意なものをつかみ取り、試行錯誤しながら暮らしやすい環境の整備に努める」大切さを述べていらっしゃいます。特に、私は「試行錯誤しながら」に大きな意味があると思うのですが、皆様はどうお考えになるのでしょうか。

誰もが幸せになる権利、とは言うは易し、それをどう保障していくのか、大人は、学校はどう考えていくべきかを改めて考えたいと強く思わせてくださった野澤和弘さんに感謝をいたします。